高経附高「ツバサプロジェクト」3年目

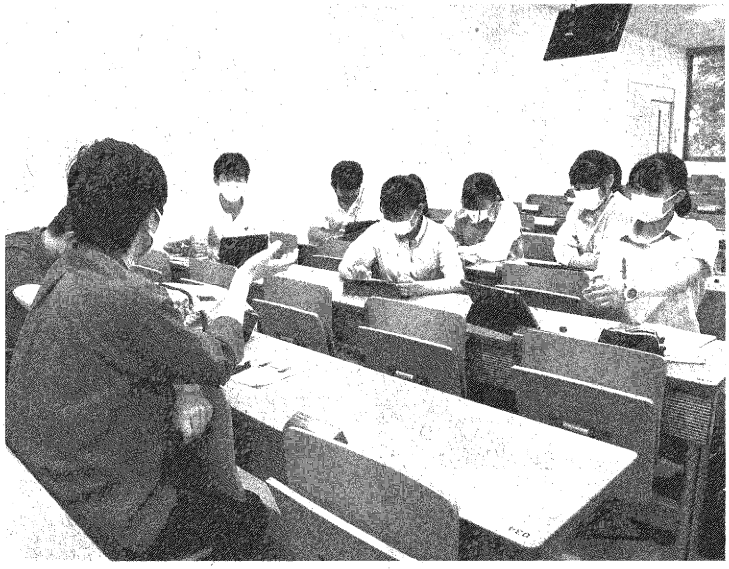
産業界と連携 広い視野養う

国際的な視点で地域に貢献する人材を育成しようと、高崎経済大附属高（新部雅之校長）は、大学や産業界と連携した教育プログラム「TSUBASA（ツバサ）プロジェクト」を展開している。文部科学省のスーパー・グローバル・ハイスクール（SGH）事業の後継として始まり、本年度で3年目。各学年で特色ある授業を実施し、生徒の思考力やコミュニケーション能力など多様な力を育てている。（平山舜）

「仕事のやりがいや、成果が出た事業は何か聞いてみては」「『どういうところが具体的な強みか』を聞いた方が、詳しく聞けるんじゃないかな」―。今月上旬、高崎市上並榎町にある高崎経済大の教室。同大の学生と同高の3年生が、オンラインで予定する企業訪問の際の質問項目について、真剣に話し合う光景があった。

同プロジェクトの一環で、高大が連携して行っている「コラボゼミ」の一幕だ。高校生40人と、同大経済学部の矢野修一教授のゼミで学ぶ13人が参加。キャリア教育などの観点から企業について学んでいるほか、世代を超えた交流を通じて生徒の社会性を育んでいる。

IHI（東京）にオンライン訪問する新井凜さん



企業訪問の際の質問内容について、高崎経済大の学生と話し合う高経附高の生徒ら

高経大生とコラボゼミも

(18)は「航空関係に興味があり選んだ」とし、質問内容をよく練った上で、「営業や人権に関する取り組みをよく聞き、学びたい」と意気込んでいた。

同プロジェクトでは、文系、理系にそれぞれ中核となるクラスを設け、多彩な実習や体験、探求学習を展開する。文系は産業や雇用、企業戦略などを学び、理系は環境問題や災害などを学ぶ。コラボゼミや企業訪問は文系での中心的な取り組みとなっている。

他にも、タブレット端末を使ったICT教育や、希望者向けの海外研修も実施し、英語力のほか、ディベートやプレゼンの能力なども養っている。

新部校長は「地元高崎でグローバルな視野を育て、地域に貢献できる人材を育成していきたい」とプロジェクトへの意気込みを語っている。

高崎経済大附属高では1年から、後の学年に備えたキャリア教育にも力を入れている。

今月上旬、同高の体育館。1年生約280人が集まり、教育プログラムの企画などを手掛けるNPO法人DNA代表理事の沼田翔二朗

インタビュー法 学ぶ

1年からキャリア教育

さん(31)からインタビューの仕方を学んでいた。

多角的に考えて尋ねる力などを養うことを目的に、この日は友人を対象に実施。夏休みには身近な人に仕事についてインタビューし、壁新聞にまとめる。

2021.07.19.上毛新聞 教育・NIE面